

青年期女子が「ネットを介した出会い」を実現させる社会的・心理的要因 —経験者と非経験者の差異に注目して—

代表研究者 片山千枝 金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士後期課程

1 背景

近年、多くの青少年が携帯電話やスマートフォンなどの自分専用のネット端末を所持し、ネットを利用していることは複数の先行研究より明らかとなっている（内閣府 2018 など）。青少年は自分専用のネット端末を所持することで情報を受信するだけでなく、自ら情報を発信していることも考えられる。また、情報を受発信する中で、同窓生だけでなく他校や他県の見知らぬ者と知り合う可能性もある。その結果、「ネットを介した出会い」を実現させることも考えられる。出会いを実現させたことで、充実した学生生活を送ることができる者がいる一方で、サイバーストーカーやストーカーを含む性的被害に遭う者もいる（加藤 2013）。それゆえ、出会いの実現は青少年にとって、理想的なものになるとは限らない。しかしながら、伊藤（2011）が群馬県の高校生 1,794 名に対して行った質問紙調査によると、「ネット上で知り合った人と実際に会ったことがあるか」との問いに対して、約 10 年前の調査にも関わらず、女子の 18.3%、男子の 9.3%が「ある」と回答していた。フィルタリング会社のデジタルアーツ（2018）が実施した 618 名を対象とした調査でも、男子より女子の方がネットで知り合った友だちとのリアル化を望み、女子高校生に限定すると 27.1%が既に出会いを実現させていた。上記より、出会いの実現はリスクを伴うものであるがそれにも関わらず、一部の青少年は出会いを実現させており、また、男子（生徒・学生）よりも女子の方が出会いに対して積極的であると考えられる。

上記を踏まえ、本研究では青年期女子の「ネットを介した出会い」が実現される社会的・心理的要因を経験者と非経験者の差異から明らかにする。なお、ここでは「ネットを介した出会い」（以下、括弧をはずす）を、加藤（2013）の研究に基づき、「オフライン上で交流のない者とソーシャルネットワーキングサイトやインスタントメッセージなどの交流サイトを介して知り合い、実際に会うこと」とする。それゆえ、異性との出会いだけでなく同性との出会いも含まれ、また、1対1で実現される出会いだけでなく、1対n、n対n、n対1で実現される出会いも対象とする。いわゆる「出会い系サイト」を介した出会いは本研究において対象としない。

2 目的

本研究では青年期女子がネットを介した出会いを実現させる社会的・心理的要因を明らかにすることを目的として調査研究をする。それを明らかにする過程において、出会い経験者と非経験者の差異に注目する。具体的には以下 4 点の仮説に基づき、調査研究を進める。

第 1 に、出会い経験者と非経験者は K スケール得点（久里浜医療センター 2010）や賞賛獲得欲求・拒否回避欲求得点（小島ほか 2003）において有意差があると予想する。出会い経験者はネット上で知り合った相手と直接会うまでに複数回やりとりすることが予想されるため、出会い非経験者よりネット利用時間が長く、場合によってはネット依存に陥っている可能性があると考えたからである。また、出会い経験者は他者から賞賛されたり拒否されたりすることに対して敏感であることも考えられる。以上を踏まえ、ネット依存度をはかるための K スケール得点と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求得点を出会い経験者と非経験者で比較する。

第 2 に、出会い経験者と非経験者で (1) 家族、(2) 友人、(3) 恋人、(4) 学校・仕事、(5) 趣味や生き方において差異があると予想する。これは出会い経験者が非経験者と比べて対面関係において相談する相手が少なく、自分の考えや想いを共有する機会が少ないため、それを補う目的で出会いを実現していると考えたからである（社会的補償仮説¹⁾）。

第 3 に、出会いの実現に対する考えについて出会い経験者と非経験者で差異があると予想する（加藤 2013）。出会い経験者は出会いの実現に対して楽観的であるがゆえに出会いを実現させてしまうと考えたからである。しかし、加藤（2013）の研究では出会い経験者も出会いを実現させる前は悲観的・消極的な考

えを有しており、本研究で再度検証したい。

第4に、出会い経験者が出会いを実現する理由や過程を整理する中で、出会い非経験者にはない経験者の特徴が見出せると予想する。以上4点の仮説に基づき調査研究をする。

3 方法

3-1 研究協力者

機縁法とSNSでの公募により、青年期女子35名（ハンドルネームE1～E21, N1～N14）、青年期男子6名（ハンドルネームB1～B6）の計41名に対して半構造化インタビューを実施した。青少年の中でも自分専用のネット端末を所有している可能性の高い、16～22歳を対象にインタビューを実施した。青年期女子35名のうち、ネットを介した出会い経験者は21名（E1～E21）で、非経験者は14名（N1～N14）であった。なお、本研究は協力者への倫理的配慮のため、金沢大学の「人を対象とする研究倫理審査」を受け、承認されている。

3-2 質問紙項目の設定

質問項目については表の通りである（表1）。加藤（2013）の研究を基に作成した。また、基本情報として、年齢、性別、出身地（都道府県）、職業、居住状態（実家または一人暮らしか）、家族構成について尋ねた。加えて、仮説に基づき、Kスケール、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度についても回答してもらった。回答が得られなかった項目については「不明」と明記している²⁾。参考までに、本研究の協力者全員に対して、ネット端末へのフィルタリング導入の有無を尋ねたところ、インタビュー時点でフィルタリングを導入していると明言したものはいなかった。

表1 質問項目 一部

ネットを介して知り合った人と実際に会ったことはありますか。 (出会い経験者に対して) ネットを介して知り合った人とのエピソードを教えてください。 (出会い非経験者に対して) ネットを介した出会いに対してどのような考えを持ちますか。

4 結果

4-1 青年期女子35名のネットを介した出会い経験者と非経験者の差異

久里浜医療センター（2010）が翻訳したKスケールを用いて、「全くあてはまらない」1点、「あてはまらない」2点、「あてはまる」3点、「非常にあてはまる」4点で採点した。有意水準 $\alpha=5\%$ でExcelを用いたt検定の結果、出会い経験者と非経験者で有意差はなかった（ $t=2.06$, ns）。

次に、小島ほか（2003）が作成した賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を用いて、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で尋ね、それらを得点化した。有意水準 $\alpha=5\%$ でExcelを用いたt検定の結果、賞賛獲得欲求得点について出会い経験者と非経験者で有意差はなかった（ $t=2.05$, ns）。拒否回避欲求得点についても有意差はなかった（ $t=2.04$, ns）。

最後に、インタビューの中で言及された出会い経験者と非経験者の特徴として（1）家族、（2）友人、（3）恋人、（4）学校・仕事、（5）趣味や生き方の5点から特記すべきことを整理した（表2）。なお、出会い非経験者で父母共に健在の者は家族関係について回答が得られた者、全員であった。

表 2 出会い経験者と非経験者の特徴

出会い経験者の特徴	出会い非経験者の特徴
<ul style="list-style-type: none"> • 母子家庭 (E1, E2, E4, E7, E17) • 趣味に没頭 (E8, E10, E14, E20) • いじめ経験 (E3, E4, E11) • 登校拒否経験 (E3, E4, E7) • サイバーストーカー経験 (E1, E2) • セクシャルハラスメント経験 (E1, E2) • セクシャルマイノリティ (E5, E11) • 子育て中 (E19, E21) • リストカット経験 (E7) • 精神病院通院 (E7) • 父子家庭 (E12) • 妊娠・中絶経験 (E2) • 昼夜逆転の生活 (E9) • 母が出会いに夢中 (E13) • 小学校から電車通学 (E17) • アイドル活動 (E18) 	<ul style="list-style-type: none"> • (職業としての) 音楽家 (N6) • 異文化交流への関心 (N10) • セクシャルハラスメント経験 (N14)

4-2 KH Coder を用いた出会い経験者と非経験者の差異

探索的かつ補足的ではあるが、本研究ではネットを介した出会い経験者と非経験者の差異を量的側面から検討するため、計量テキスト分析ソフトである KH Coder (Ver. 2. Beta. 31) を用いた。なお計量テキスト分析とは、樋口 (2014: 15) によると、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法」と定義され、いわゆる「テキストマイニング」³⁾ に対応している。

本研究では青年期女子 35 名 (出会い経験者 21 名, 出会い非経験者 14 名) の出会いに関する言及を分析対象とした⁴⁾。KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った結果、出会い経験者の総抽出語数 (分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数) は 29,571, 異なり語数 (何種類の語が含まれていたかを示す数) は 2,041 であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語は 29,417, 異なり語数は 2,037 であった。出会い非経験者の分析に使用される語は 10,318, 異なり語数は 1,057, 出会い経験者と非経験者を統合したデータの分析に使用される語は 39,714, 異なり語数は 2,340 であった。

出会い経験者の出会いに関する発言を計量テキスト分析し、ウォード法によるクラスタ分析をした。デンドログラムを作成した結果、以下の通りとなった (図 1)。2 群に分類されたが、うち 1 群は E13 の 1 名であったので、E13 を除き、再度クラスタ分析をした。その結果、図のデンドログラムが作成された (図 2)。出会い非経験者の出会いに関する発言も同様にデンドログラムを作成した結果、以下の通りとなった (図 3)。また、探索的ではあるが、出会い経験者と非経験者の出会いに関する発言を統合した上でデンドログラムを作成した結果、以下の通りとなった (図 4)。

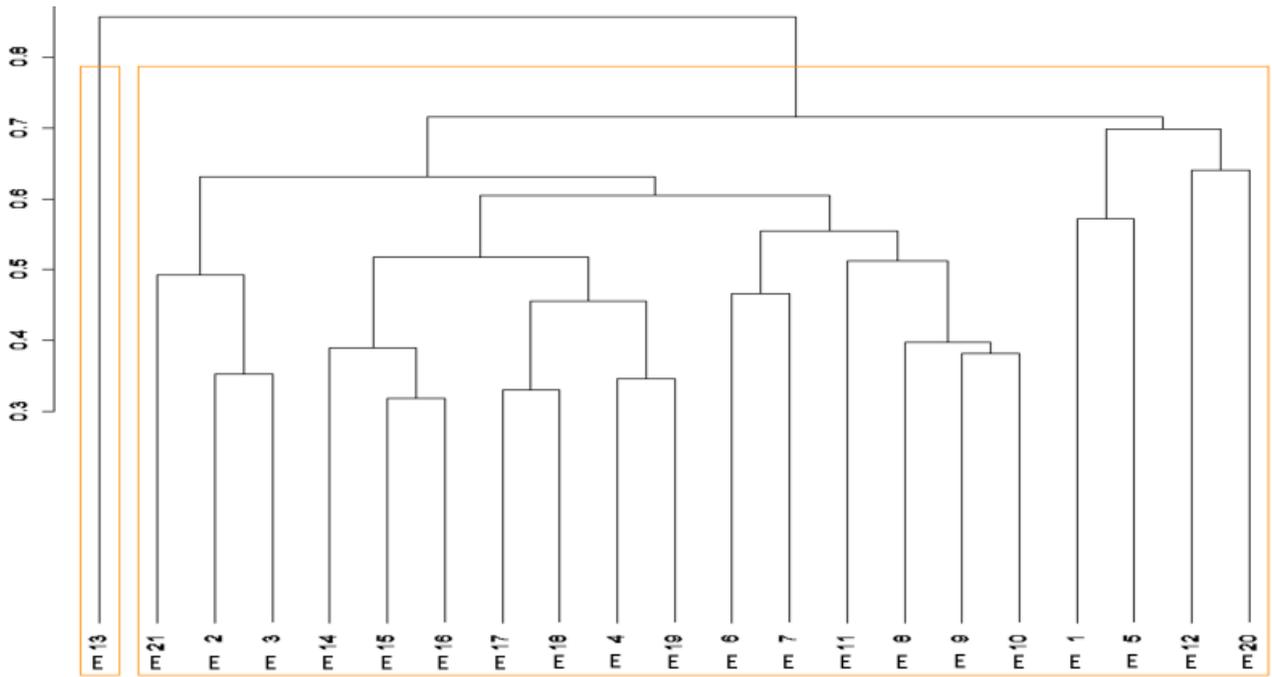


図1 出会い経験者のデンドログラム

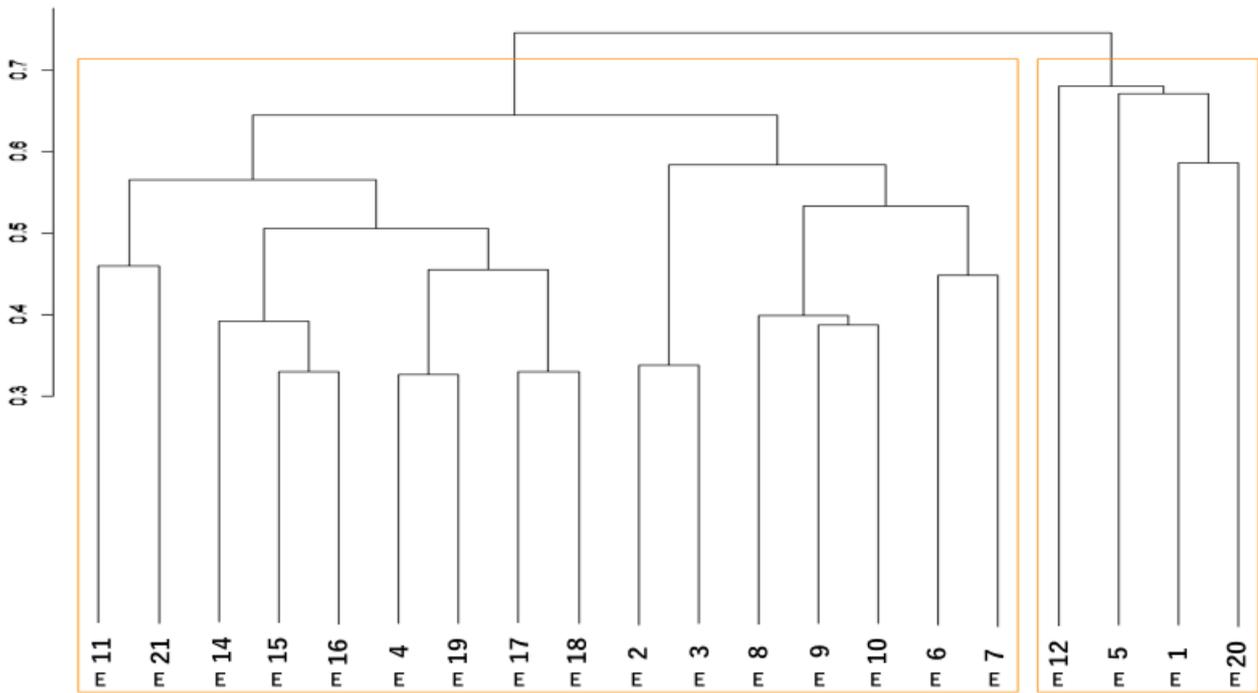


図2 E13を除く出会い経験者のデンドログラム

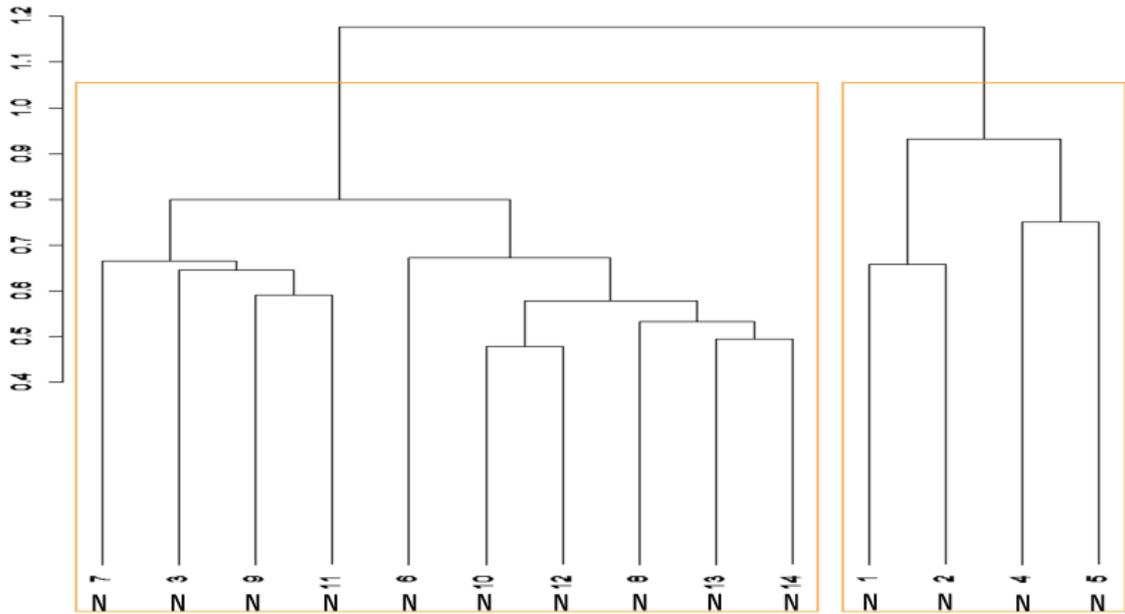


図3 出会い非経験者のデンドログラム

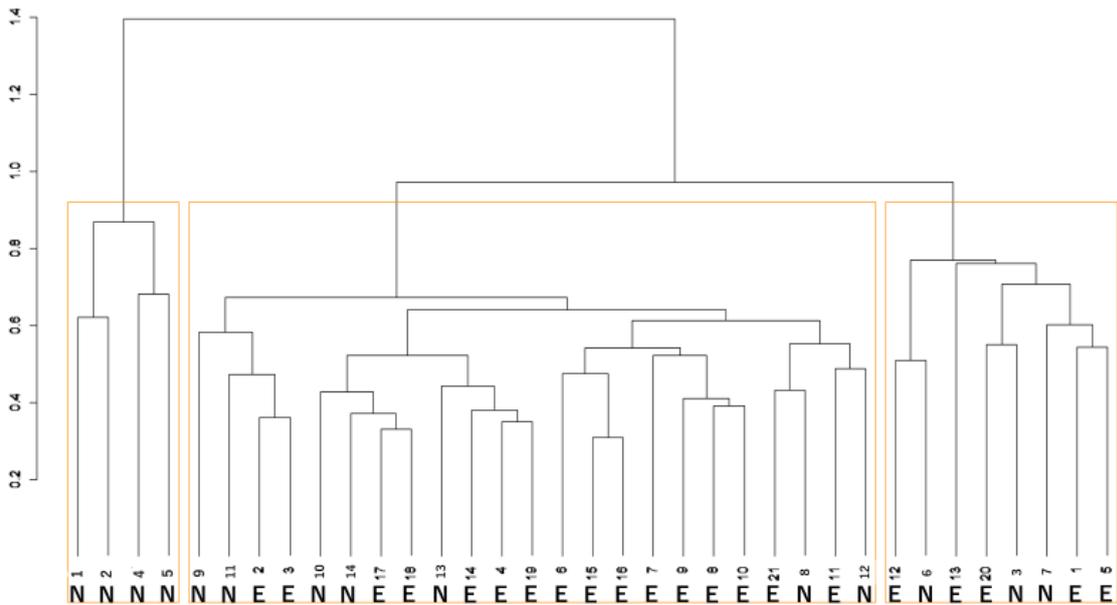


図4 出会い経験者と非経験者のデンドログラム

4-3 ネットを介した出会いの実現に対する考え

出会いの実現に対する考えについて本研究の協力者である青少年41名から得られたインタビュー結果を切片化し、コーディング作業をした。またコーディングに基づき概念を生成した(図5)。ここでは青年期男子6名の発言も分析対象とし、多様な概念形成を目標とした。

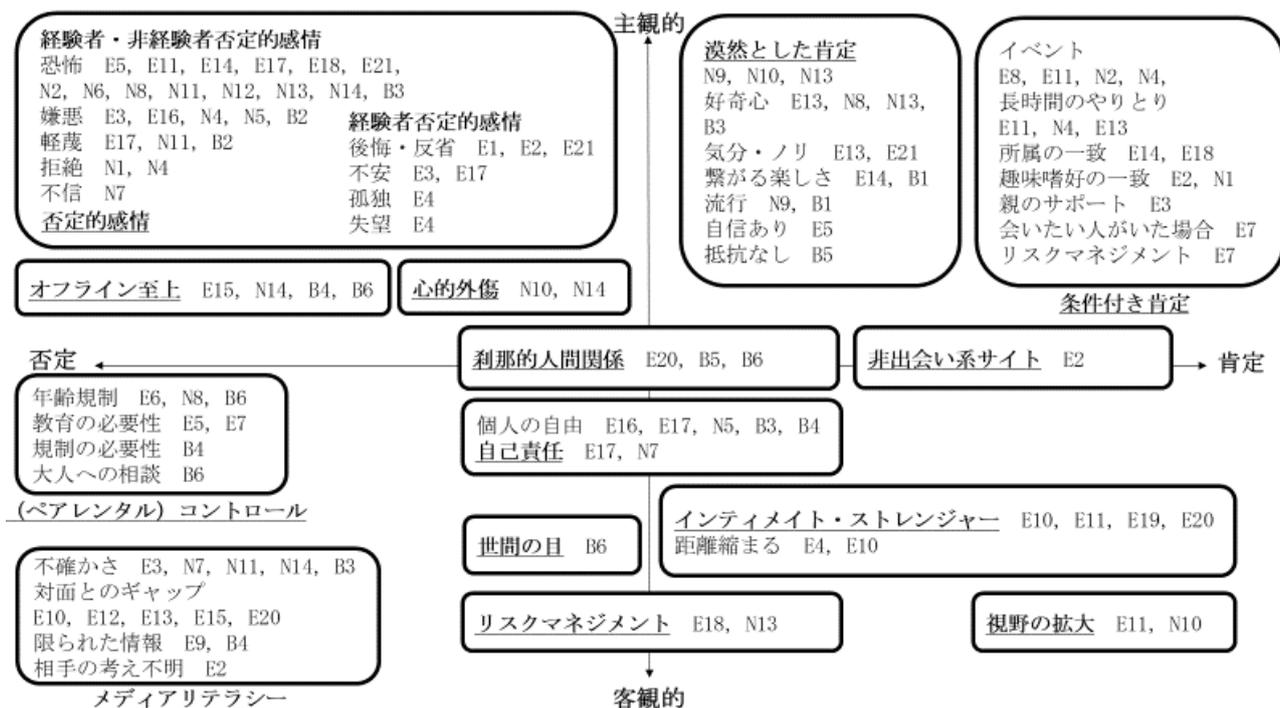


図5 ネットを介した出会いの実現に対する考え

4-4 ネットを介した出会いを実現させた理由・過程

青年期女子 35 名のうち、出会い経験者である 21 名のエピソードに注目して、出会いの理由や過程について整理する。

(1) 出会いを実現させた理由

出会いを実現させた理由についてコーディング作業をし、KJ 法により概念を生成した。その結果、出会いは「能動的出会い」と「受動的出会い」に分類された。「能動的出会い」は、青年期女子自らがネットを介して見知らぬ者と知り合い、その相手と直接会うという明確な意志や覚悟をもって実現させた出会いを指す。一方、「受動的出会い」は青年期女子の既存の友人・知人や家族がネットを介して見知らぬ者と知り合い、直接会う際に付き添うなどして間接的に実現させた出会いを指す。

「能動的出会い」は更に「話題の共有」「恋愛への発展」「ビジネス」に分類された(図6・7)。「話題の共有」はネットを介して知り合った者と話題を共有することで親しくなり、結果的に直接会ったというものである。具体的には「いじめ」「セクシャルマイノリティ」「近所・近隣」「共通の進学先」「オフ会」「趣味嗜好の一致」「インティメイト・ストレンジャー」(富田 2009)の7点が挙げられた。「恋愛への発展」は主に異性とやりとりする中で互い、もしくは一方が好意を抱き、結果的に直接会ったというものであり、「相手との交際」「相手からのアプローチ」「相手へのアプローチ」「(異性の)友人関係充実」の4点が挙げられた。「ビジネス」は相手と自分の所有物を直接交換するために出会いを実現させるというものであり、「トレード」が挙げられた。本研究ではエピソードが見られなかったが、援助交際も「ビジネス」に該当する。

「受動的出会い」は「周囲からの紹介」により間接的に出会いを実現させたというものであり、具体的には「友人からの紹介」と「家族からの紹介」の2点が挙げられた(図8)。

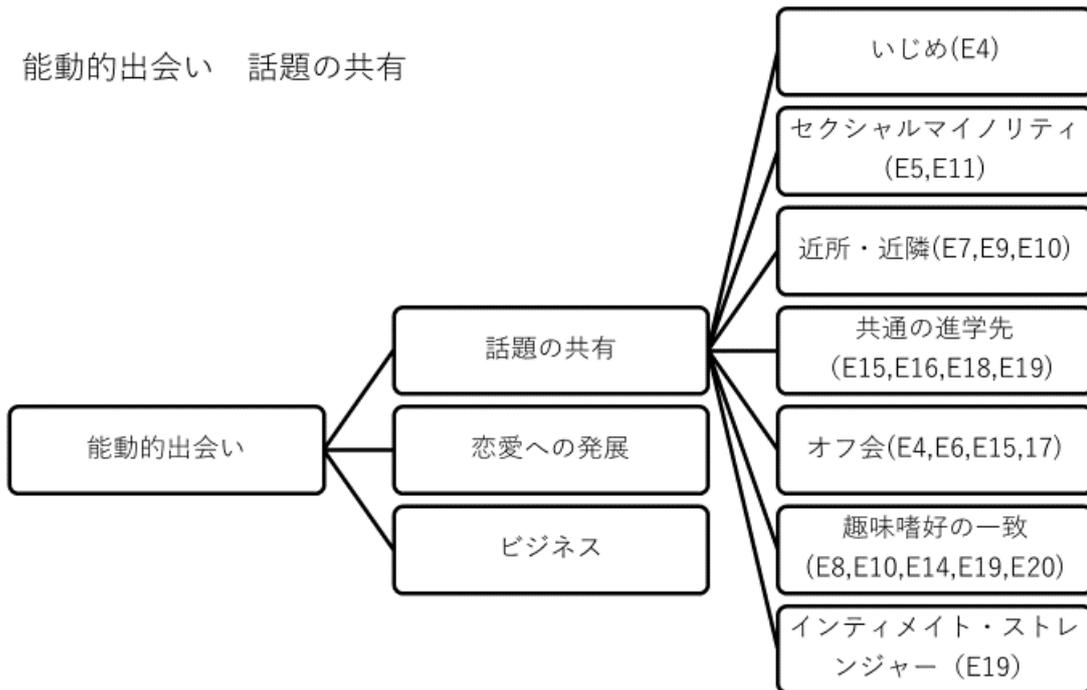


図 6 能動的出会いの分類「話題の共有」

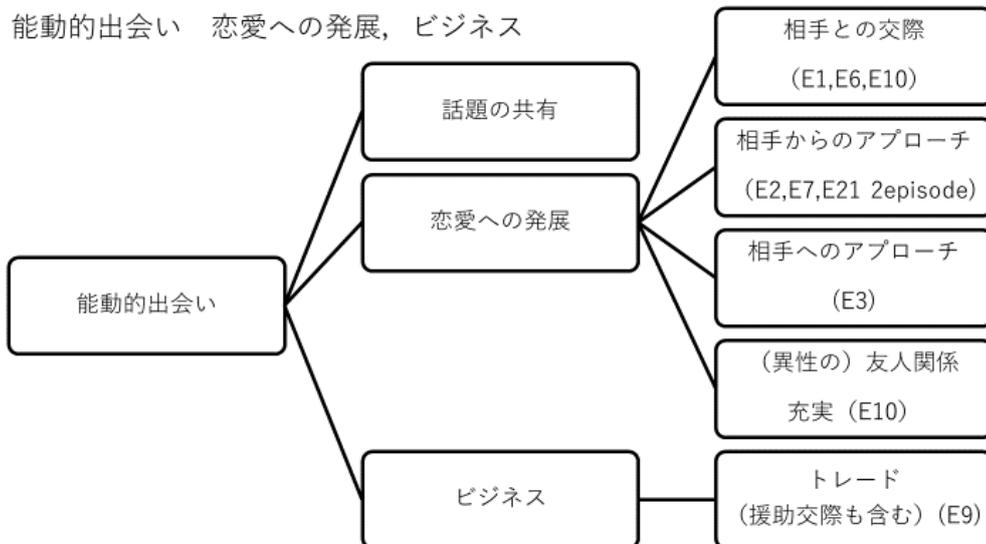


図 7 能動的出会いの分類「恋愛への発展」「ビジネス」

受動的出会い



図8 受動的出会いの分類

(2) ネットを介した出会いを実現させた過程

次に出会い経験者 21 名から得られた 32 のエピソードを切片化し、「オンライン上 (ネット)」「オフライン上 (対面関係)」でどのようなやりとりや出来事があったのかを整理した。また、その時の「気持ち」や「周囲の反応」についても時系列で整理した (表 3)。加えて、出会いを実現させた後、(1) 現在も相手との関係が継続しているもの (継続)、(2) 消滅したもの (消滅)、(3) 不明のもの (不明) の 3 点からエピソードを分類した。なお、(2) 消滅したもの (消滅) は、互いまたは一方の意志で関係を断った場合や繋がった相手と 1 年以上一切連絡を取っていない場合を指す。

本研究では 32 のエピソードが得られたが、そのうちネットを介して繋がった相手との関係が継続しているエピソードは 10 あった。一方、相手との関係を意図的に断った/断られた、消滅したエピソードは 19 あった。その他、相手との関係が不明であるエピソードは 3 あった。それぞれのエピソードの内訳は表の通りである (表 4)。

表 3 時系列で整理したエピソード事例 一部省略

近所・近隣 (E10) 小学5年生				
オンライン	そのとき相手は中学1年生でした。(中略) そんなに遠くなく、県内で、まあ、年も近いし同性でって感じ	最初は顔も知らなかったんで、自分の中のイメージというか話している中で勝手にイメージしているとか		もう、5、6年になるんで、話すことは減っているんですけど、一応連絡はとれます
オフライン			・最初は家で会うことになって、私の家に家族がいて、ここでご飯を食べるっていうのが一番最初だった ・イメージとのギャップは最初ありました	
気持ち		そのとき (のイメージ) は、いい意味でだったと思います	・そのときは心配というか危なそうな感じはなかったです ・家で普通に、学校の友だちと遊ぶような感覚で ・ネットだと学校とか仕事とかネット以外の事情を知らないんで、実際にあって、学生ってわかるのは新鮮でよかったと思います	
周囲の反応		最初はまああぶないんじゃないのっていうふうには言われたんですけど		

表4 32のエピソードの内訳

関係が継続しているエピソード	10	「能動的出会い」 「話題の共有」	7	「いじめ」(E4) 「セクシャルマイノリティ」(E5・E11) 「趣味嗜好の一致」(E14) 「インティメイト・ストレンジャー」(E19) 「近所・近隣」(E7・E10)
		「能動的出会い」 「恋愛への発展」	3	「相手からのアプローチ」(E2) 「相手へのアプローチ」(E3) 「相手との交際」(E10)
関係が消滅したエピソード	19	「能動的出会い」 「話題の共有」	11	「オフ会」(E4・E15・E17) 「近所・近隣」(E9) 「趣味嗜好の一致」(E8・E10・E19・E20) 「共通の進学先」(E15・E18・E19)
		「能動的出会い」 「恋愛への発展」	6	「相手からのアプローチ」(E7・E21 2エピソード) 「(異性の)友人関係の充実」(E10) 「相手との交際」(E1・E6)
		「能動的出会い」 「ビジネス」	1	「トレード」(E9)
		「受動的出会い」 「周囲からの紹介」	1	「家族からの紹介」(E13)
不明	3	「能動的出会い」 「話題の共有」	2	「オフ会」(E6) 「共通の進学先」(E16)
		「受動的出会い」 「周囲からの紹介」	1	「友人からの紹介」(E12)

5 考察

5-1 ネットを介した出会い経験者と非経験者の差異

本研究の結果より、出会い経験者と非経験者の差異は K スケール得点、賞賛獲得欲求・拒否回避欲得点において見られなかった。一方、出会い経験者と非経験者の差異として特記すべきこととして、出会い経験者は他者との関係において保護者と過ごす時間が少なかったり、学校や職場に行くことができず、友人・知人との信頼関係を築くことが難しい状況に置かれたりしていた。そのため、満たされない他者との関係を補償するため、出会いを実現させている可能性が明らかとなった。

5-2 計量テキスト分析からみた出会い経験者と非経験者の差異

出会い経験者と非経験者の差異について、KH Coder を用いて計量テキスト分析をした。ワード法による

デンドログラムを作成した結果、出会い経験者は2群、出会い非経験者は3群に分類できた。また、探索的であるが、出会い経験者と非経験者を統合して分析した結果、出会い経験の有無に関係なく、本研究の協力者を3群に分けられた。

第1に、出会い経験者の2群について、E13以外、出会いを実現させることに対して自発的であったことから、KJ法による分析から生成された「能動的出会い」に該当すると考えられる。一方、E13については、自発的ではなく、母親の付き添いにより出会いを実現させたことから「受動的出会い」に該当するといえる。しかし、「受動的出会い」群に分類されたのはE13の1名であったので、E13は外れ値であると判断し、E13を除く20名で再度KH Coderを用いた計量テキスト分析をした。その結果、「客観的出会い」群と「主観的出会い」群に分類するのが相応しいと判断した。「客観的出会い」群は基本的に対面関係を充実させたいと考えており、ネットを介した出会いは人間関係を充実させるための補的手段として捉えていた。一方、「主観的出会い」群は出会いを実現させることに対して、主観的かつ肯定的な意見が多く聞かれた(図9)。

第2に、出会い非経験者の2群について、N1, 2, 4, 5は出会いそのものに関心がなかったり、出会いを実現させる以前に他者とコミュニケーションをとること自体に苦痛を感じる者がいたりしたことから「出会い無関心」群と命名する。また、N3, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14の10名は出会い経験はないものの、出会いに対して比較的寛容であることから「出会い寛容」群と命名する。実際、ネットを介して見知らぬ他者と繋がり、やりとりした経験のある者が多く含まれる。出会い非経験者は一様に出会いを実現させることに対して否定的・消極的と捉えられがちであるが、クラスタ分析より、出会い非経験者自体も量的視点から分類できたことは本研究の成果である。

第3に、出会い経験者と非経験者を統合した3群について、そのうちの1群は全員出会い非経験者(N1, 2, 4, 5)であった。この4名は出会いを実現させることに対して興味関心がほとんどなく、他者とコミュニケーションをとること自体に苦痛を感じる者が含まれていたため、「出会い無関心」群と命名する。また、E1, E5, E12, E13, E20, N3, N6, N7の8名は出会いのメリットを理解している一方で、出会いのデメリット・リスクについても言及している者が複数いたことから、「出会い慎重」群と命名する。最後の残り23名は出会い経験者と非経験者両方が含まれていた。出会いを実現させることに対して寛容的な意見が多く聞かれた。また、出会いを実現させることは自己責任、個人の自由といった発言も多く見られたことから、「出会い寛容」群と命名する。総じて、出会い経験者・非経験者をあわせてクラスタ分析をしたところ、出会い経験者と非経験者の2群に分類されたわけではなく、出会い経験者・非経験者が混合するかたちで「出会い無関心」群、「出会い寛容」群、「出会い慎重」群に分類されたことは新たな発見である。

ネットを介した出会い経験者の分類

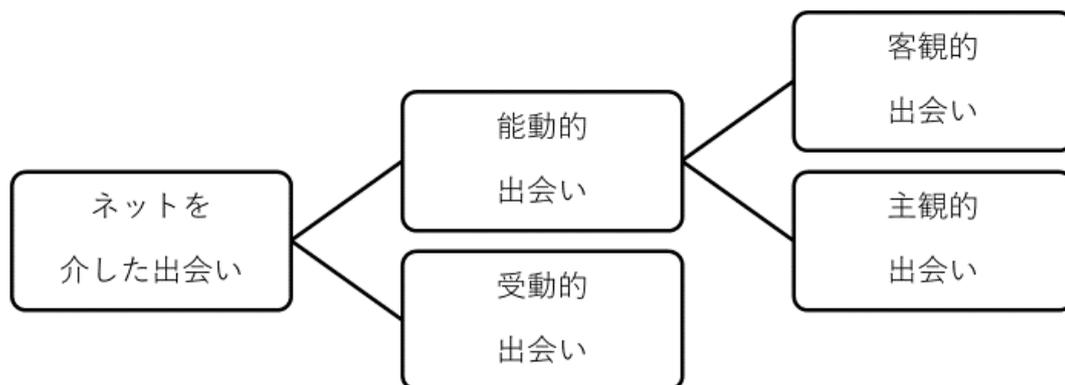


図9 出会い経験者の分類

5-3 社会的補償のための出会いとそれに伴うリスク

ネットを介した出会いにより形成される関係は一部の出会い経験者が「とっかかりの足掛かりみたいなもの (B5)」と述べていたように、長く続くものでないことから、「刹那的人間関係」(加藤 2018) になり易い。また、仮に相手との関係が継続したとしても、相手から「心的外傷」(N14) を負うような嫌がらせを突然されたり、場合によっては事件・犯罪に巻き込まれたりすることも十分想定される。以上を踏まえると、出会いのリスクは2点に分類される。第1に、トラブルや事件・犯罪に巻き込まれるリスクである。これは警察庁 (2018) を始めとした複数の先行研究で指摘されており、本研究でもこれに該当する事例があった。第2に、ネットを介して繋がった相手との関係が「刹那的人間関係」に終わるリスクである。この点について言及した先行研究はほとんどない。しかし本研究の結果より、ネットを介して知り合った相手と時間をかけて信頼関係を築いたつもりでいても、その関係が短時間で終了し、それによって傷ついた経験について話した者もいた (E4)。それゆえ、「刹那的人間関係」も1種の出会いのリスクになるといえる。

5-4 「虚無的人間関係」

本研究の一部の出会い経験者は出会いを実現させた理由や過程から判断すると、家族関係や友人・知人との関係に恵まれているとは言い難い。それゆえ、それを補うために出会いを実現させていることが考えられる。出会いの実現に対する考えからも明らかであるように、複数の出会い経験者が出会いを「肯定」していることから、出会いを実現させることは社会的サポート⁵⁾を補う役割をある程度果たしているといえる。しかし、出会いによって繋がった相手とは濃密で継続的な、いわば血縁や地縁のような関係を取り結ぶことができない。その証拠に、出会い経験者から得られたエピソード32のうち19は出会いを実現させた相手と現在は繋がりを有していない。「受動的出会い」に関する2エピソードと「トレード」の1エピソードを除いても、全数の半数以上のエピソードで相手との関係は消滅または終了していた。

しかしながら結果的に「刹那的人間関係」となっただけであって、時系列で相手とのやりとりの様子を整理する限り、一部の青年期女子は最初から参入・離脱を前提として相手と繋がったわけではない。一方で「ライブの間だけとか、イベントのその間だけ」(E20)、「とっかかりの足掛かりみたいなもの」(B5)として出会いを捉えている者も一定数存在した。

以上を踏まえ、「刹那的人間関係」について再定義する必要があると考える。「刹那的人間関係」はE20やB5が言及していた、「一時的な関係を目的としてネットを介した出会いを実現させ、その関係が短期間で消滅または終了してしまうもの」と、E4が言及していた、「相手と濃密で継続的な関係を築くことを目的として出会いを実現させたにも関わらず、その関係が短期間で消滅または終了してしまうもの」の2点に分類されるといえる。前者をこれまで用いてきた「刹那的人間関係」(以下、括弧をはずす)とし、後者を「虚無的人間関係」としたい。つまり、「虚無的人間関係」(以下、括弧をはずす)とは「対面関係において新たに他者と濃密で継続的な関係を築くことを目的としてネットを介した出会いを実現させたが、その関係が短期間で消滅または終了してしまうもの」と定義する。それゆえ、加藤 (2018) の刹那的人間関係の定義は虚無的人間関係に該当すると考えられる (図 10・11)。

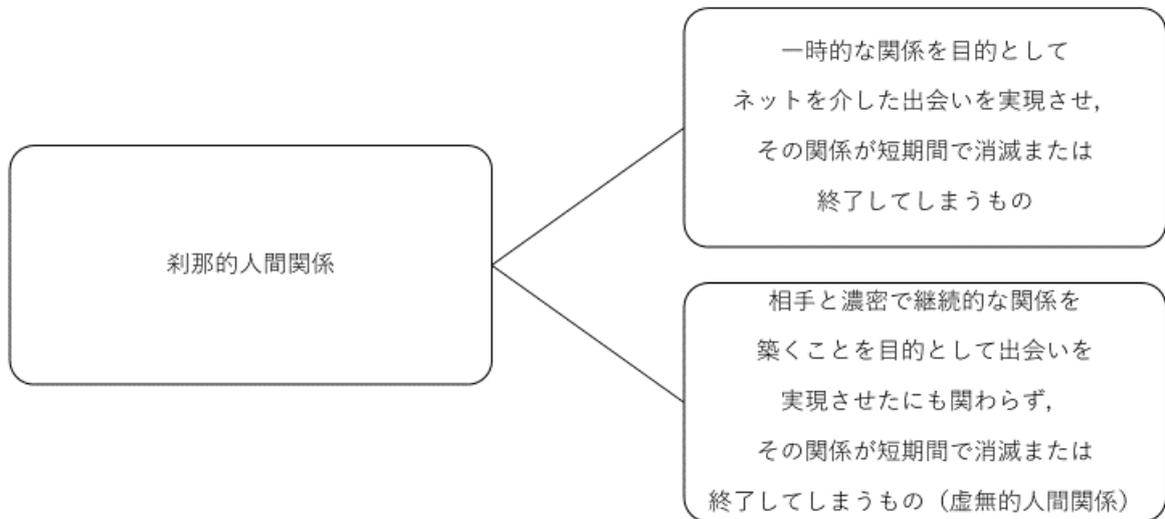


図 10 刹那的人間関係の分類

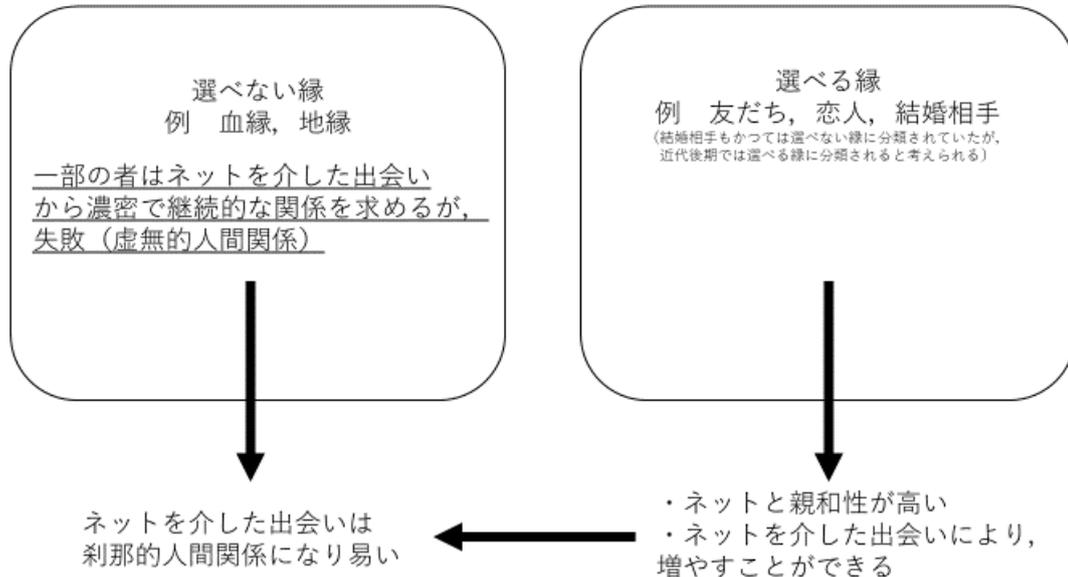


図 11 刹那的人間関係の位置づけ

5-5 ネットを介した出会いを促す刹那的人間関係

刹那的人間関係が出会いを更に促すという側面もある。結果より、刹那的人間関係において相手との関係は短期間で終了または消滅することが明らかとなった。そのため、他者との継続的な関係を望む場合は、新たに相手を見つけなければならないので、出会いを繰り返し実現させる必要がある。学校や職場など対面関

係において、継続的な関係を他者と築くことができるのであれば、出会いを実現させる必要はない。しかし対面関係においてそのような関係を他者と築くことができなければ、ネットを介した出会いに頼るしかない。実際、先に言及した通り、出会い経験者は非経験者と比較して不登校やいじめ経験、セクシャルマイノリティや母子・父子家庭といった特徴を有していた。つまり、対面関係の中で社会的サポートが十分に得られる環境にあるとは言い難い。仮に不登校であるならば、友人・知人や教員からのサポートもあまり期待できない。そのため、ネット上で知り合った相手からのサポートに頼るしかないのであるが、出会いによりもたらされた関係は「選べる縁」(上野 1994)であるが故に、その関係を維持・強化し、「選べない縁」と同等の抛り所にするためにはかなりの時間と努力を必要とする。そのような背景から、出会いによる関係は利他的になり易いと考えられる。以上の理由から、本研究の協力者も繰り返し出会いを実現させているといえる。

5-6 ネットを介した出会いがもたらす関係

ネットを介した出会いによる関係が刹那的なものにならず、仮に相手と強固で継続的な関係を築くことができたとしても、その関係が青年期女子にとってメリットをもたらすとは限らない。

たとえばE2は「相手からのアプローチ」がきっかけで出会いを実現させ、その後交際に至ったが、交際後まもなく妊娠した。インタビューに応じてくれたのは妊娠3カ月のときで、その時E2は相手と結婚し、子どもを出産することに前向きであった。しかしその数か月後、中絶したことを筆者はメールで知らされた。中絶の理由は、E2がまだ専門学校生という立場であり、卒業し、資格を取得するまで子育てに十分な時間が取れないことや、交際相手もまだ若く、安定した収入を得られる状況ではないので、互いの家族と話し合った結果、中絶という結論に至ったとのことだった。相手との関係は中絶した後も継続しているが、婚約・結婚しているわけでもないの、いつ関係が解消されるかわからないという。E2は「相手からのアプローチ」がきっかけで出会いを実現させたこと、相手との子どもを妊娠したこと、結果として中絶したことについて後悔はしていないと話していたが、出会いの実現が彼女の心身に与えた負の影響はかなり大きかったことが推測される。E2は相手を家族に紹介した際も、出会いがきっかけであるとは言えなかったことから、実際は出会いを実現させたことに対して後ろめたさに近い、否定的感情を有していたと考えられる。ただ、自分が出会いを実現させ、相手と交際をし、相手の子どもを産み育てようとしていた事実を否定しないために、インタビュー時は否定的感情への言及を避けたといえる。

上記より、仮に出会いの実現による関係が終了または消滅しなかったとしても、当事者にとってその関係が利益をもたらすものであるとは言い切れない。E2は結果として出会いの実現によりいわば不利益を被ったわけであるが、それを認めたくないため、関係を継続させる努力をしていると考察する。具体的にはE2の場合、相手との親しい写真や動画をネット上に頻繁に掲載している。恐らく、自分と相手の関係が強固かつ継続的であることを不特定多数の人に見てもらおう(見せつける)ことで、単純に相手と自分が親しいことを自慢するだけでなく、相手が自分から離れていかないように、見知らぬ者が自分と相手の関係を壊さないように予防線をはっているのだと考えられる。

ネットを介した出会いに限らず、対面関係でも相手との交際の末に、妊娠・中絶する例は少なくないが、ネットを介した出会いは相手との交際に至るまでの手間暇を大幅に省略し、これまで関係を持つことができなかった相手と容易に繋がることを可能にした。また、相手との関係も容易に断つことができるため、自分の一時的な満足や快樂のために利用する者にとっては都合の良い手段となる。一方で、E2のように相手の子どもを妊娠・中絶した場合などは、心身ともに不利益を被ることになる。

6 まとめ

本研究の結果・考察より、ネットを介した出会い経験者と非経験者の差異はほとんどない可能性が示された。それゆえ、インタビュー時において出会い非経験者であっても、その後出会いを実現させている者もいることが考えられる。一方で、出会い経験者は母子・父子家庭であったり、いじめや不登校を経験していたり、特殊な趣味があったり様々な特徴を有していたので、対面関係において他者から理解やサポートを得ることが難しい環境にあったと考えられる。そのため、「選べない縁」を補償するために、出会いを実現させている可能性も示された。

しかし、結果・考察で言及した通り、出会いは青年期女子が大きな不利益を被る可能性の高い出会いの手段であることがわかった。それは相手との関係が刹那的にならず、相手と(結婚など)「選べない縁」を形成

できる可能性があったとしても、である。その理由はE2の事例から明らかだ。総じて、ネットを介した出会いにはリスクが伴うということ、トラブルや事件・犯罪に巻き込まれるリスクはもちろんのこと、「選べない縁」を形成するにはあまりにも脆い関係に終わってしまうリスクである。その意味で、出会いは不合理である(図12)。

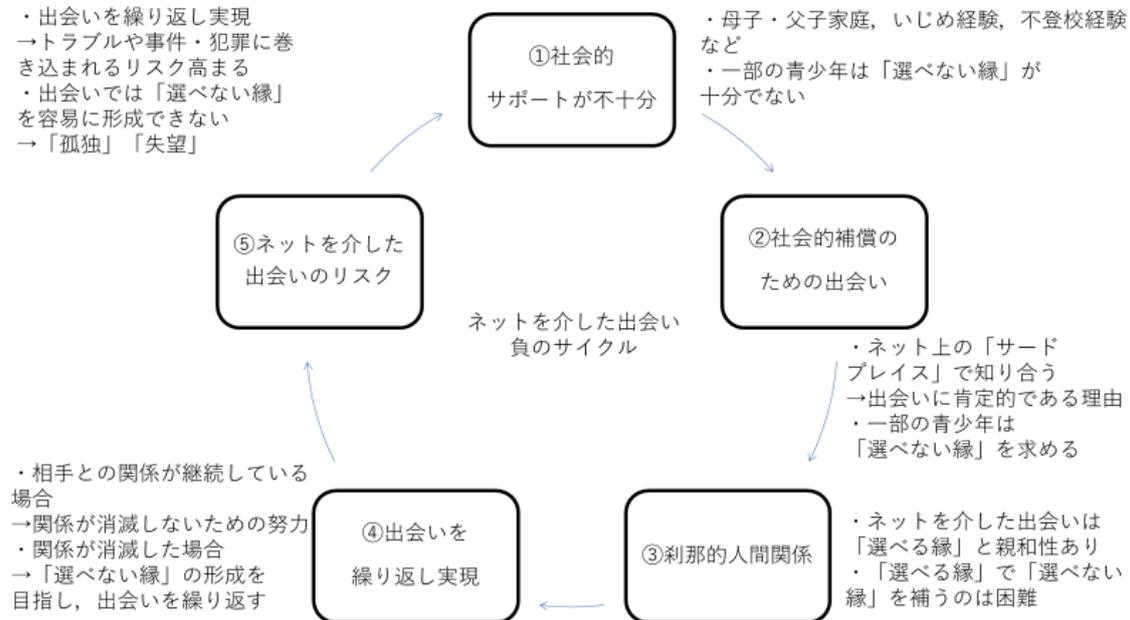


図12 不合理なネットを介した出会い

7 課題

本研究の結果は、限られた協力者から得られた発言を分析したものであり、結果に一般性を持たせることはできない。そのため質問紙調査を実施し、客観性を担保する必要がある。しかし現時点で言えることは、対面関係において他者と満足な関係を構築することが難しい青年期女子がそれを補うためにネットを介した出会いを実現させている可能性が高いということである。そのため、そのような女子をいかにサポートしていくかが今後の社会的・心理的課題になるといえる。解決策の1つとして、たとえばGranovetter(1973)が指摘する「弱い紐帯の強さ」に注目し、対面関係における「ゆるいつながり」を複数作ることで、不用意に出会いの実現を繰り返すことが減少すると考えられる。

【参考文献】

阿部彩, 2014, 「包摂社会の中の社会的孤立 : 他県からの移住者に注目して」『社会科学研究』65(1), 13-30.
デジタルアーツ株式会社, 2018, 「第11回未成年の携帯電話・スマートフォン利用実態調査」

<https://www.daj.jp/company/release/data/2018/030701_reference.pdf> Accessed 2019, April 10.

Granovetter, Mark, 1973, "The strength of weak ties," *American Journal of Sociology* 78(6), 15-32.

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。

伊藤賢一, 2011, 「中高生のネット利用の実態と課題—群馬県青少年のモバイル・インターネット利用調査から—」『群馬大学社会情報学部論文集』18, 19-34.

加藤千枝, 2013, 「青少年女子のインターネットを介した出会いの過程 : 女子中高生15名への半構造化面接結果に基づいて」『社会情報学』2, 45-57.

加藤千枝, 2018, 「青年期女子のネットを介した出会いからみた刹那的人間関係」『2018年社会情報学会(SSI)学会大会論文集』168-172.

警察庁, 2018, 「平成 29 年における SNS 等に起因する被害児童の現状と対策について」
 <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/H29_sns_koho.pdf>Accessed 2019, April 10.

小島弥生, 太田恵子, 菅原健介, 2003, 「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」『性格心理学研究』
 11(2), 86-98.

久里浜医療センター, 2010, 「インターネット依存自己評価スケール(青少年用) K-スケール」
 <https://kurihama.hosp.go.jp/hospital/screening/kscale_t.html>Accessed 2019, April 10.

McKenna, K. Y. A. and Bargh, J.A., 1998, “Coming out in the age of the Internet: Identity ‘demarginalization’ through virtual group participation,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 75(3), 681-694.

内閣府, 2018, 「青少年のインターネット利用環境実態調査」
 <<https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h30/net-jittai/pdf-index.html>> Accessed 2019, April 10.

富田英典, 2009, 『インティメイト・ストレンジャー—「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究—』関西大学出版部.

上野千鶴子, 1994, 『近代家族の成立と終焉』岩波書店.

注書き

- 1) 内向的な性格などの理由から対面関係において他者との満足な関係を築くことができない場合、視覚的手掛かりの少ないネット上のやりとりは他者からのサポート(社会的リソースと表現されていた)が得やすくなると McKenna&Bargh(1998)は述べている。
- 2) K スケール得点, 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求得点共に, E13, E14, N10 からは回答が得られなかった。インタビュー内容に影響されることを防ぐため事前回答としたが, 上記3名についてはインタビュー後メールで回答を求めたが, 得られなかった。
- 3) 樋口(2014:1)によると, テキストマイニングとは「コンピュータによってデータの中から自動的に言葉を取り出し, ささまざまな統計手法を用いた探索的な分析を行う。それによってパターンやルール, ひいては知識の発見をめざすもの」と紹介されている。
- 4) 本研究では ChaSen システムを利用した。
- 5) たとえば阿部(2014)は「社会的サポート」を個人的社会関係資本の1つと位置付けている。個人的社会関係資本は主に3点から成り立っており, 「社会的参加」「社会的交流」「社会的サポート」がある。「社会的サポート」は更に2点に分けられ, 道具的サポートと情緒的サポートである。道具的サポートとは, 困ったときに頼りにできる人がいること, 情緒的サポートとは, 悩みごとの相談にのってくれる人がいること, 寂しい時の話し相手がいることなどを指す。

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
青年期女子のネットを介した出会いからみた刹那の人間関係	『2018年社会情報学会(SSI)学会大会論文集』168-172	2018年9月
ネットを介した出会い経験者と非経験者の差異—KH Coderを用いた計量テキスト分析に基づいて—	『2019年社会情報学会(SSI)学会大会研究発表論文集』203-206	2019年9月
青年期女子のネットを介した出会いの様相—刹那の人間関係に注目して—	電気通信普及財団テレコム社会科学学生賞 佳作	2020年3月